

教育委員会

コラム Vol.14

教育長室の窓から

校歌らしくない校歌



日本のほとんどの小・中・高等学校では校歌が制定されており、入学式、卒業式、始業式・終業式などの式典で歌われています。（幼稚園では、園歌が制定されているところもあります。）一方、大学などでは、正式な校歌がないところもあります。

次の文言は、私が設立に関った義務教育学校（認定こども園も併設し、0歳から15歳までが同じ校舎で学んでいます。）の校歌の歌詞です。

「ひとりっていいな ルンルンルン みんなもいいな グングングン ひとりもいいけど でもやっぱり
みんなといっしょがいいな」

「ぼくとあなたと わたしときみと すきなものはちがうけど きらいなものも ちがうけどひとりと
ひとりとひとりでみんな ひとりとひとりとひとりでみんな」

作詞者は、校歌に寄せた想いを次のように語っています。

「私の経験から言っても、子どもの頃は自分と自分以外の人間を、例えば英語のように一人称（I）二人称（YOU）で区別することはあまりなかったと思います。学校に上がると家庭での緊密な親子兄弟関係とは違う人間関係に入り、そこで自分という存在が人間関係の網の目に組み込まれていることを、だんだん自覚していくことになるのではないのでしょうか。そんな考えがあってこんな歌詞が生まれました。（原文）」

実は、作詞者は谷川俊太郎さんです。本町にある楠隼中・高等学校の校歌も作詞しています。この歌詞が送られてきた際、なかなか谷川さんの意図が理解できずにいましたが、口ずさめば口ずさむほど、子ども、仲間など、一人ひとりの個を尊重し協働する中で、一人ひとりが存在することの大切さを感じることができました。教育に携わる者として、忘れてはならないことです。ちなみに作曲は息子で作曲家の谷川賢作さんで、親子でならと引き受けていただきました。校歌の最後は「ドレミファソラシド ドシラソファミレド ゆめのもりでまなんであそぶ」で締めくくられており、まさに校歌らしくない校歌です。

教育長の

ちょっといい話

好奇心の塊のような人

肝付町に来てから、ときたま次のような手紙・メモ？をいただきます。

「鹿児島方面からの帰り道、国分の高速入口を過ぎた数百メートル先に食堂があり、そこのラーメンは絶品である。大盛りがお勧め。食堂の数百メートル先を左折すると都城方面の国道10号線、右折すると垂水・桜島方面の県道があるから右折すること。道なりに進むと道の駅垂水がある。名産のビワを使ったビワソフトがおすすめ。店内に入ってすぐ右側に、海ぶどうがあるから購入すべし。ブリとカンパチの心臓の唐揚げは手に入らないものと思った方が賢明である。牛根大橋を通過後、垂水市内にある温泉に入るのもよいと思われる。」

私にとっては観光パンフ以上の観光案内であり、この通りまわると間違いがなく、これまで何度も助けられました。教えてくれるのは、肝付町にある接骨院の先生です。この先生は、好奇心の塊のような人で、休日には県内外の興味をもった場所や店を訪れ、接骨院の患者さんにも紹介しています。私も、紹介された場所や店をほとんど訪れましたが、風景も食も間違いがない所ばかりでした。（食については番付表も作られています。）

子どもたちにとっても、好奇心は大切な資質であり、学びにつながります。大人になっても好奇心を持ち学び続けている接骨院の先生の姿から、あらためて学びの真髄を感じています。

